

50年ぶりの同期会

田中章雄

創部 70 周年記念誌の発行にあたって我々中 43 回、高 1 回の同期も責任の一端を担うことになったが、何分にも 50 余年前のこと、記憶もすっかり薄れているので途中で一堂に会して思い出を語り合いまとめようと、去る 6 月 26 日（土）、同期会の前に昼食をとりながら話が弾んだ。場所は小田原本町の清小松、参加者は内野茂、遠藤博司、小倉真一郎、田中章雄、山本廉の 5 名（米国在住の鈴木友一、都合のつかなかった米澤豊は欠席したが、一文を寄せてくれた）。

サッカー部再出発の頃

昭和 20 年の秋、終戦の虚脱状態の中で発足した蹴球部は総勢 80 名、同期も 15 ～ 6 名はいたと思うが最後まで残ったのは 7 名であった。入部の動機もまちまちであったが、いずれもサッカーとは何かも知らない全くの素人であった。

終戦後の何もない時代で殆ど裸足で地下足袋やズック靴があればいい方だった。ボールも 1 個か 2 個それも試合用以外はつぎはぎだらけで変形したボールだった。だからニューボールが出された時には皆目の色変えてボールを奪い合ったものだった。

入部 1 週間後に試合に出してもらったが、オフサイドも知らず何度も笛を吹かれ、先輩からは怒鳴られて困惑したことがあった。

全国大会に出場できたのは

我々の時は終戦によってサッカーを始めた訳である。つまり横一線の状態から、2 年間で全国大会に出ることが出来たということが特色といえるのではないかと。ではどうして代表チームになれたかという、次の 3 点に絞られると思う。

第 1 に熱意溢れる素晴らしい先輩に恵まれたこと。

第 2 に最優秀の指導者を得たこ

と。

第 3 にそれに応じられた学校、我々の力もあったこと。

素晴らしい先輩に恵まれたこと

創部以来、どうしても勝てなかった打倒湘南という大目標に向けて 1 つにまとまった OB の熱意はすさまじいものだった。合宿練習の時など現役の数より OB の数の方が多く、普段の練習や試合の時にも多くの先輩が駆けつけて応援して下さった。その中心になっていたのが戸田達雄先輩で本当に良くまとまっていた。

加藤哲夫先輩他若手の熱心な指導も、我々にとっては大きな力となっていた。特に毎試合必ず応援に駆けつけて、試合の感想や意見を克明に書いてよこしてくれた加藤さんの分厚い手紙には、勝ち負けや、技術の向上もさることながら、サッカーに対する情熱や人生の生き方に触れた内容が多かった。ハードな練習を重ねることによって仲間の癖や性格を体感し、それをゲームに生かすことを教えられた。こうした練習によって培われた仲間意識と、やり遂げたという自信が、われわれのその後の人生観を変えさせ、生き方の基本となっていると思う。

良き指導者に恵まれたこと

当時の大学の最優秀な選手を OB のお骨折りでコーチに迎え、時宜に適した指導をされたことも又大きかった。昭和 22 年元旦からの合宿は宮沢先輩の家（聖公会）を合宿所にして行なわれたが、その時のコーチは東大の馬越、小林さんでスライディングタックルを教えられた。正月の霜の降ったグラウンドで泥んこになってたたき込まれたスライディングタックルは、我々にボールに対する執着心とファイティングスピリットを身につけさせ、このときから急激に力を付けてきたように思う。今なら皆反則だろうが……。

更に技術面で磨きをかけてくれたのが加納（兄弟）、岩谷さんをコーチに迎えたときからである。このと

き身につけた基本のプレースキックは今でも大きな自信となっている。

そして戦術面では CF のポストプレー、両インナーの走り込み、オープン攻撃のセンターリングと逆サイドの走り込み、守備では当時珍しかったスリーバックを取り入れワンサイドカットの徹底を教えられた。このように我々の技量にあわせて段階的にしかも素晴らしい指導を得られ、我々は本当に幸せであった。

我々の力も高くなっていったこと

本当の素人集団であった我々も、徐々に力を付け、それなりの能力があったのではないかと。そうでなければ優秀なコーチの人達も来てくれなかっただろうし、面倒見れば何とかなるという気持ちがあったのだろう。加納さんから「サッカーの素質のある奴はいない」といわれて、かちんときた憶えがあるが、確かに本当の意味で素質のあったのはほとんどなかっただろうな。でも負けん気と頑張りではどのチームにもひけは取らなかったと思う。そのことは後年加納さんをして「どんなハードなトレーニングにも決して音を上げない頑張屋のチーム」といわしめている。

当時の蹴球部顧問、坊先生、久保寺先生をはじめ学校も全面的にバックアップして下さい、戸田、加藤、露木、宮沢さん他多数の先輩の方々の物心両面にわたる熱気に我々も発憤し、打倒湘南という大目標に向かってひとつにまとまったことが結果として現れたのだと思う。

諸先輩の思い出

戸田達雄先輩

試合の時、元気の出る薬だとブドウ糖注射を打ってもらったりした。口数少ない謹厳居士で近寄りたがたい雰囲気があったが、おつきあいしてみると意外に温かい奥の深い人格者であった。合宿の時の炊事当番では飯の炊き方から天ぷら、キンピラの作り方、カレー、シチューの作り方などすべて戸田さんから教えられた。その腕前は、小倉のお母さんが

舌を巻くほど専門的で、微に入り細にわたっていた。海軍におられ食道楽だったと聞いているが、本当に細かく具体的だった。また、一度しか見せてもらえなかったが、トランプのカードの切り方などプロ級の鮮やかさで一同唖然としたものだった。またオペラがお好きで時々一人で東京まで鑑賞に行っておられたという。聞いてみると良いものだよと笑っておられたという。

〔面倒見の良さ〕

全国大会の時だったと思うが、戸田さんの家に泊めてもらって夕食をご馳走になり、立派な檜風呂に入れて貰ったことがある(内野)。足の親指の爪を治療して貰った(遠藤)。子供達や女房までお世話になった(小倉、田中)。GK用のジャージーを貸して頂いた。慶応のラグビーのものだったらしい(遠藤)。

〔良き指導者を求めて〕

当時県協会の片岡さんを通じて全日本のお歴々の松丸さん、関野さんなど湘南での試合によく見えていた。そういう関係もあって東大の馬越、小林さん、早稲田の加納さん、岩谷さんなどコーチ招聘にお力添えを頂いたのではないかな。

加藤哲夫先輩

先にも述べたが、我々の精神的な成長に最も大きな影響を受けたが、東大の両コーチをお招きするについては、特にお力添えを頂いた様である。

露木 清先輩

本当に物のない時代にコーチの方々を、経営されている旅館「清光園」に宿泊させて、温泉付で接待して頂き、最終日には部員全員でお邪魔するなど大変なご迷惑だったと思う。

宮沢健夫先輩

コーチ、監督として直接ご指導を受けたが、合宿所にご自宅の聖公教会をお借りするなど本当にお世話になった。

湘南に勝った試合

今まで何度も戦ってその都度大敗を喫していた湘南と、22年春頃から対等に戦えるようになり、遂に全国大会予選で1-0で勝つことが出来た。結果は1-0だが部員には絶

対に勝てるという自信はあった。特に、後半幻の2点目が入ってからは湘南もがっかりしていた。その場面は左からのセンターリングを小倉がきれいなダイレクトシュートで見事にネットを揺すったが、惜しくもオフサイドを取られ幻に終わった。

我々は勿論うれしかったが、先生方の狂喜乱舞は驚くばかり、試合終了後のグラウンド1周の時、久保寺先生と一緒に走りながら選手の誰彼と無く泣きながら背中をたたき続けてくれた。

南関東大会

埼玉、千葉、神奈川の3県が全国への代表をかけて争ったわけだが、浦和との決勝はまたもや1-0。下馬評では浦和中の圧倒的有利が伝えられ、事実、試合は押されっぱなしだったが、バック陣の奮戦で0点に押さえ、後半僅かな反撃機に米澤のシュートで1点をあげて勝利を掴んだ。

<全国大会>

米澤の日記に譲る。

今後のサッカー部に寄せて

我々の時代は、終戦後の挫折感と混乱の中でのスタートだったが、サッカーは、荒廃した我々の心に新しい時代の感触と、明日への希望を与えてくれるものとなった。“打倒湘南”という悲願に向かって、先生方も先輩も現役も、本当に一つになって激しく燃えていた。そして、結果がこれに続いた。思えば混乱と貧困の中にありながら、そこには青春の躍動があった。共に鍛え、汗を流し、喜びや悔しさを分かち合ったあの日々は、何ものにも代え難い青春の門であり、心身鍛練の道場であった。ある意味では、本当に恵まれた時代であったといえよう。

しかし、現在では、それがうまく機能していないように思える。あれから50有余年、サッカーを取り巻く環境もすっかり変わって、我々の時代と同列に論ずることはできないが、母校小田高のサッカー部が、より強くなってもらいたいと願うのは、当然のことと思う。そのためにどうすべきか、OBも現役も、学校も、原点にかえて、じっくりと考

え直す必要があるのではないかな。現役の諸君には、心身鍛練の場として熱中してほしい。戦績は別にしても、必ず後の人生に役立つ何かをもたらしてくれるものだから……。我々OBとしても、気持ちの上では若いつもりだが、お互いに古希に近い。体を使って現役に何かをしてやるということは、もう無理かも知れない。だが、**経済的な支援をするというのも一方法であると思う**。聞けば、OB会費の集まりが悪いという。

600名を越えるOB会員がその気になれば、大きな力となることは目に見えている。お互い頑張ろうではないか。そして、一つになって燃える小田高サッカー部を、もう一度取り戻そうではないか。

我が旧中時代の日記から

故 米澤 豊

我々は、昭和20年8月の終戦を学徒動員の中で迎えた。戦後の混乱と極端な物不足にも拘わらず、八幡山のグラウンドに響くボールの音に誘われて、サッカー部生活が始まった。空虚な挫折感を癒し、新たな没入しうる対象を求めていたからであろうか。そして精進の結果、昭和22年暮の全国中学サッカー大会出場を果たし、初戦を突破し第2回戦で涙を飲んだ。戦前の栄光と次代以降の全盛期をつなぐサッカー部中興の士として称賛された。しかし、このことは我々も然る事ながら、久保寺先生、坊先生、戸田、加藤、宮沢先輩をはじめ諸先輩の方々、部員全員の並々ならぬ努力の然らしむる処であった。

全国大会出場の経緯については、すでに創部50周年記念誌に同期の小倉真一郎、山本廉諸兄の叙述があるが、何と言っても全国大会出場は、我々のサッカー部生活の総てを凝縮したハイライトシーンであり、青春の悔い無き証であった。

私の手許に、我が中学時代の粗末な日記帳が残っている。改めて見るに、全国大会出場の状況についても、色々と自分なりの印象を書き連ねて

ある事が分かった。当時 17 歳の一少年が、この 7 日間に何を見つめ、何を感じたか、日を追って再録してみたいと思う。敢えて多少の重複を承知の上でこれをテーマに決めたのは、往時の諸兄がこの記録を通じて、それぞれの記憶を蘇らせる拠り所となればと思ったからである。これを果たすことが出来れば望外の喜びである。

12月19日；前日午前、南関東代表、全国大会出場の壮行式が中庭で行われた。各方面から祝辞が寄せられ、物心両面に亘る多大の応援に感激した。明日は早朝出発のため前夜から、十字町の宮沢家に泊めて戴く。6時、小田原駅出発。早朝にも拘わらず、先生を初め在校生の皆さんが応援旗を掲げて壮途を祝ってくれた。車中では、暫く興奮冷めやらず、夢心地であった。12時間の長旅の後、京都駅到着。駅近くの旅館（北海館）に投宿する。

12月20日；小雪のちらつく寒い朝であった。通りを隔てた東本願寺の大伽藍が雪で煙り印象的だった。9時、京都駅発。阪急梅田を経て、宝塚線の中山寺に到着した。中山寺は西国 33 カ所霊場 24 番札所にて、聖徳太子創建の古刹である。

我々の宿舎となった成就院は数多くの塔頭の 1 つで、我々の念願成就には幸先の良い場所となった。住み心地も良く、何の心配も無かった。

午後、近くの小学校校庭で軽い練習を行った。

12月21日；午前中大会の行われる西宮球技場を見学した。立派なグラウンドである。隣の練習場で汗を流す。午後、大阪毎日新聞社の大講堂での選手会に出席する。

12月22日；9時、西宮球技場にて開会式を挙げる。今、このグラウンドに立てる喜びを噛みしめ、誇らしさと幸福感で一杯であった。

第 3 試合、北九州代表山田中学との対戦となり午後 1 時 20 分キックオフ。敵はキック力と当たりは強かったが、戦術に見るべきもの無く、早めのパスワークで前半 2 点を先取り、後半はパスを潰されて無得点に終わった。勝利は得たものの、実力

の発揮には至らず、わざわざ西下された岩谷氏から小言を頂戴し、一同シュンとなる。

12月23日；大会第 2 日目、1 回戦残り 4 試合消化の為、我々は休養日となった。午前中試合見学、午後は練習で宿舎に戻る。明日はいよいよ、強豪広島高師附中とあたり、今回遠征の山場となる。湘南中との戦いを想起し、必死の思いで戦いに臨むことを誓い合う。

12月24日；広島高師附中戦、午前 11 時半キックオフ。予想以上のスピード感のある球回しによって徐々に中盤を制せられ、全力を絞って頑張ったが、前半 2 点、後半 2 点を押し込まれ、完敗であった。戦いが済んで、宮沢監督から「良くやった」と言われたとき、それまで押さえていた涙が溢れて止まらなかった。皆も泣いていた。私には、敗けた悔しさと共に、今までの練習を支えてきた最後のゲームがここで終わったと言う寂寥感がそこにあったのである。

12月25日；帰りは大阪駅発午後 11 時となり、それまで自由行動となった。有志連れだつて宝塚劇場(アデュー 1947 年、ミモザの花)を見学した。華やかな舞台の展開に目を見張り、楽しんだが、些か後ろめたい気もあった。その後、大阪市内をぶらつき、3時間並んで、漸く車中の人となり、帰途についた。寝苦しい夜を明かし、翌日、11 時半小田原駅に降り立った。校長先生以下先生方の出迎えを戴いた。一週間振りの故郷は懐かしく、敗けた悔しさが再び甦り悲しかった。

青春の心火は

近頃年のせいから、我が身を回顧する機会が多い様に思う。「人生朝露の如し」で取り立てて申す物も無いが、往時茫茫の中で、少年時代のサッカー一部生活で得られた青春の心火は、今もって、私の胸に生きていることに気付く。世の中は改革期であり、物事の価値観の変貌に驚くばかりの昨今である。創部 70 周年を迎えるに当たり、多くの諸先生、諸先輩に培われてきた小田高サッカー部伝統の豊饒たる土壤に、いずれの次

代にも通ずる、心豊かな少年達が育てられ、巣立って行くことを心から念願してやまない。

(注記) 日記部分の再録は原文要約

未だに走るサッカー一部員

鈴木友一

此処カリフォルニアのシリコンバレーの真ん中で毎晩 3 km 以上走っています。今 69 才ですが、小田中時代に鍛えたお陰でしょう、未だに走り続けております。

51 年前、打倒湘南を目標に先生方、先輩方、学生達、そしてサッカー一部員と全体が丸となって頑張った試合……、「やれば出来る!!」が私の脳裏を駆け巡っていた。技術的には湘南の方に勝ち目があつたと思う。でも、私たちの粘り強さが彼らの技術を打倒し、1 対 0 で遂に私達の念願が叶った。

久保寺先生が私の背中を

久保寺先生が私の背中を痛い程叩いて、涙を流しながら、「勝った、勝った」と叫びながら、グラウンドを走つたのを憶えています。実に感動的でした。涙か汗か分かりませんが、唯、熱いものが私の顔を流れていました。

アメリカに来て、悲しいとき、嬉しいとき、苦しいときに思い出すのが「やれば出来る!!」の哲学です。本当に小田中時代に体験した事は、私には一生尊い思い出です。先輩と部員の皆様にも心より感謝いたします。有難う御座いました。

これからも、アメリカの地で、走り続けます。(99年7月10日)

追伸：今アメリカの女子サッカーが中国を下し、World Cup を獲得しました。感激のため、私も涙を隠しきれませんでした。